

しろくまの語句直前追い上げ講座 第四回 問題編

さて、低学年（１～４年）で習う漢字を用いたものでも、なかなかどうして中学受験では侮れない出題があるんですよ。ド忘れしやすい、あるいはかんたんであるがゆえにかえって難問、というものがあります。私立の伝統校は、入試問題の伝統も長い：それらの学校の先生は、ただ難しいだけの出題なんかはけっしてなさいません。受験生の盲点をうまくついた出題をされます。「かんたんなのにむずかしい」読み書きをまとめてみました。

小学校一年生配当漢字を使った書き取り

- 一 マル（ ）みがあつて、おだやかな味わい。
- 二 席をア（ ）けて待っています。
- 三 イクドウオン（ ）に、みんながすすめる。
- 四 イッシ（ ）みだれず行動する。
- 五 父はコゴト（ ）が多い。
- 六 何を話しかけてもウワ（ ）の空だ。
- 七 木がハ（ ）える。
- 八 はずかしさのあまりセキメン（ ）した。
- 九 新しい自転車にサック（ ） 、試しに乗ってみた。
- 一〇 そんな問題はタイ（ ） したことがない。
- 一一 年越しそばをチュウモン（ ） した。
- 一二 コダチ（ ） の後ろから、とつぜん少年が飛び出してきた。
- 一三 父のミョウダイ（ ） で参上しました。
- 一四 帽子（ぼうし）をマ（ ） 深にかぶる。
- 一五 新しい建物がリンリツ（ ） していた。

しろくまの語句直前追い上げ講座 第四回 解答解説編

一 「円み・丸み」

マルいはい「円い」と「丸い」がありますよね。「円み」と「丸み」はどっちがよいの？
実は、辞書的にはどちらも可。

☆「丸」は立体、「円」は平面の場合に用いるのがふつうです。

この例文では「角がない」という意味から「丸み」がよさそうですが、「まるやか」は「円やか」と表記するので、この「円やか」のイメージを付加したときに、あえて「円み」と表現するときがあるのです。しろくまとしてはこの場合は「円」を用いたいかなあ

二 「空けて」

「空ける」「開ける」「明ける」が入試で出る「三アけ」！

たとえば「開ける」の反対語は「閉める」ですよ。ということ

☆「閉める」が使える場合は「開ける」を選択

窓をアける ⇔ 窓を閉める ⇒ 窓を開ける

アけっびろげな性格 ⇔ 閉鎖的な性格 ⇒ 開けっびろげな性格

すきまやひまをつくるのに使うのが「空ける」です。からにする、という意味ももちろんアリ。

「部屋をアける」は「空ける」をしていますが！

「部屋をアける」は「空ける」だが、「部屋をアけ渡す」は「明け渡す」とおぼえよう！

「明ける」は、夜が明ける、だけではありません。物事が終わって始まる、という意味もアリ。ですから「梅雨アけ」も「梅雨明け」、「喪（も）がアける」も「明ける」になります。

三 「異口同音」

これは「異口同音」としてしまう誤用がありますよね。「口」は「ク」と読む場合が入試ではよく出題されます。

「口調」（くちょう）「口説く」（くどく）なども「口」を「ク」と読む代表例です。

四 「一糸」

ほかに「一糸もまとわれない」で、「すっぱだか」の意味になります。

入試によく出る「三大イッシ」が「一糸」「一矢」「一指」です。

☆「イッシを報いる」⇒「一矢を報いる」

☆「イッシもふれさせない」⇒「一指もふれさせない」

下にく表現をセットにしておぼえておきましょう

五 「小言」

ぶつぶつ文句をいう、と説明したいところですが、不平・不満にも使いますが、いっばんには「訓戒」の意味がふくまれている場合が多いですよ。

ちなみに「小」の反対で「大」にすると「大言」。「たいげん」と読んで、いばって大げさなことを言う、という意味になり、「大言壮語」という四字熟語も構成します。「大言を吐（は）く」と用います。

六 「上」

「上の空」って、よく使うのですが、あんがい、ほんとの正しい使い方をせずに用いている人いませんか？

「他の事に心が奪われて、その事に注意が向かない」

という意味です。と、いうことはあく 「他の事」を考えていたり、「他の事」が気になっ
ていて、という前提があるんですね。何も考えなくてボクっとしていただけ、なら、
「上の空」ではないんです。

「上の空で塾の講義を聞いている」

というと、何も考えなくてボクっとして聞いている、のではなく、お母さんにたのんでおいた嵐が出てくる番組のビデオ、ちゃんととれているかなあ、とか、ああ、同じクラスあの娘は今ごろ何してるかなあ、と、なっている状態なんですよ。

「上」を「うわ」と読む場合、けっこう大切です。

「上書き」「上紙」「上着」「上靴」「上すべり」「上背(うわぜい)がある」「上包み」「上っ面」「上手」「上ぬり」「上乘せ」「上履(ば)き」「上辺(うわべ)」「上回る」「上向き」「上目づかい」などなど。「上手」は「うわて」と読まず「じょうず」と読めば、別語になります。

では、「上手」のように「同じ漢字なのに読み方が違うと別語になる例」を知っているだけあげてください。大昔の灘中で出たことがありますよ

七 「生」

「上」「下」とともに、「生」は小1で習う漢字の代表的「多読語」です。

「生(い)きる」「生(い)かす」「生(い)ける」「生(う)まれる」「生(う)む」

「生(お)う」「生(は)える」「生(は)やす」「生(き)」「生(なま)」

なんと10も読みがあります。さて、「生」より多くの読み方がある字、あるでしょうか？ さがしてみてください。

さて、入試で出る「三大ハえる」は

「生える」「栄える」「映える」です。

「映える」は光を受けてかがやく様です。そこから転じて、美的調和の意味が出ました。

「着物がハえる帯」という場合は「着物が映える帯」とします。

「ハえある優勝」は、「かがやく」から「映えある優勝」も使えそうな気もしますが、「光を受けて」の場合が「映える」です。優勝は、みずから光り輝くもの。「栄えある優勝」にしてください。

では、「出来バえ」はどう書くか？

実は「出来映え」「出来栄え」どちらでもよいのですが… 厳密には、そのものができたことよって、まわりと調和した場合は「出来栄え」、ズバリそのものの良さを強調したい場合は「出来栄え」。たいていは「出来栄え」としたほうがうまくいきます。

八 「赤面」

顔が「赤く」なる場合… 恥ずかしい思いをした場合ですよ。 「赤面」はそういう場合に使います。顔色という言葉があるように、顔は「色」を用いた慣用表現があります。

「顔が青くなる」「顔が赤くなる」など… 「紅顔」というと「若々しい血色がよい顔」という意味になって「紅顔の美少年」と使用します。では「白い顔」って表現はあるの

か？！

「白面」という表現があるんですよ。「年がいかず未熟なこと」を意味します。

「そこに、白面の書生があらわれた」、なぐんて江戸川乱歩の推理小説に出てきたことがあります。(子どものときに、「どんな顔してんっ?! 白いお面をつけていたのか? 犬神家のスケキヨかぁ」と思いました)

ちなみに「白」はほんとうの「白」をあらわさない場合が多いのです。「白面」は「素顔」という意味もあります。また、平安時代の建物は「白木造」といいますが、白い色を塗っているわけではありません。木そのものを生かした、奈良時代の柱のように朱塗りではない、という意味です。

九 「早速」

音読み「ソウ」の変形「サツ」を用いた熟語です。「あることに応じてすぐ」ということです。

「早い」と「速い」の組み合わせ。そりゃ、「すぐ」の意味が深まりそうですが、「早い」と「速い」の使い分けもしておきたいところ。

「早い」は時間に余裕があること、時間が少なくてすむ、という意味です。「速い」はスピードや動きが「急」な場合ですよ。

さて、「早速」はそれぞれ訓読みが同じ(同音異字・早いと速いはどちらも「はやい」)一字を組み合わせてできている二字熟語ですよ。同じように、訓読みが同じだが字が違うものを組み合わせた二字熟語を知っているだけあげてみてください。大昔の灘中で出題されました。さて、いくつ作れるでしょうか。すぐに思いつくもの3つあげてみましょうか。「計量」は「計る」と「量る」、「計測」も「計る」と「測る」、「測量」も「計る」と「量る」です。さあ、これら以外で探してみましよう。

一〇 「大」

かんたんな字ですよ。 「大したことない」書き取りです。「大」を「ダイ」と読むより「タイ」と読む場合のほうが入試ではよく出題されます。

「大」を用いた熟語(上でも下でも可)で「大」を「タイ」と発音するものを探してみましよう。 「大切」は「タイセツ」ですよ。いくつあげられるでしょうか？

一一 「注文」

「注文」という誤字を小学生はケツコーしてしまいます。「問」のほうが口をきいている感じがするからなのでしょうかね。大昔、甲陽は、文章の中に「誤字」を一つだけ入れておいて、文中から誤っている語句を抜き出せ、みたいな出題をしていたときがあります。六甲もそうでした。ほんと大昔ですよ。そのとき「注文」というのがあったような気がします。

「文」は小1で習う漢字ですが、「注文」「文句」「天文」のように「もん」と読む場合がやはり入試では重要になります。「文書」も「ぶんしょ」のほかに「もんじょ」と読む場合があり、「古文書」は、「こもんじょ」と読みます。中国には「文選」と書いて「もんぜん」と読む詩集もあります。

一二 「木立」

「木」は「こ」という訓読みを持ちます。「木枯らし」なんか「こがらし」ですよ。「木の実」「木の葉」などは「このみ」「このは」とよく使う例です。

時代劇で、「この、こっぱ役人があゝ」と悪人が悪態をつく場合がありますよね。「こっぱ」は「木っ端」で、木の切れはしのことです。（正確には「木端」で「こば」です）

一三. 「名代」

あらま、(6)の「読み方が違うと別語になる」例が出てきましたね。

「名代」は「ミョウダイ」と「なダイ」の2つの読み方で意味が変わります。

前者は「代理」で後者は「有名」という意味。「名代の老舗(しにせ)」というと「有名な昔からある店」となります。

「名」は「夕」＋「口」。夜暗くなって顔がわからない… おまえは誰だ!? と、口で「名」乗ったことから「名」という字が構成されました。夜に人に会えば最初に自己紹介したわけですね。それが「名」となったワケです。

一四. 「目」

「目」は音読み「モク」「ボク」、訓読み「め」「ま」があります。

とくに「ま」はよく出題されました。六甲中や親和中では複数回出題されています。

☆「目深か」と「目の当たりにする」の2つをおぼえる!

「まのあたり」は「目の当たり」。ちなみに「目」は、「さかん」とも読むのを知っていましたか?

昔の日本の役人の制度で、「かみ」「すけ」「じょう」「さかん」という4役があったんです。大岡越前守とか吉良上野介とか「守」「介」のほかに「目」があって「さかん」と読みました。

名字で「目」と書いて「さがん」という人、いますよ。ほんとの話です。

一五. 「林立」

たくさんのものが並び立つ様子を「林立する」といいます。ちなみに木を立てる、「樹立」はしっかりと立てる、という意味になり、「林」にせよ「樹」にせよ、実際に木や林が立っている意味ではなく、それを比喻として転じた熟語です。（つまり「□」のように立っている」で、「□」に「林」や「樹」が使われているわけですよね。）

では、「花」を使って、同じように「花」そのものとは無関係で、比喩的に他の意味に使用する熟語は作れますか? 「花のように○○している」から転じてできた熟語をつくってみてください。「草」でもできますか?

どうですか? 小学校1年で習う漢字でも、ケッコー奥が深く勉強できるでしょう? 直前学習は「広く浅く」ばっかりと思いませんか? 「狭く深く」も有効な直前学習です。